日英語の談話標識と手続き的制約

after all と「だって」

大津隆広

1. 生起位置の類似性

談話標識 after all と「だって」は、どちらとも文末、文中、文頭のそれぞれの位置に生起することが可能である。本論では、(1a)(2a)のような文末で用いられたものを譲歩的用法、(1b)(2b)のように文中で用いられたものを想起的用法、(1c)(2c)のように文頭で用いられたものを正当化用法と名付ける。

(1) a. Now that so much was happening I feel better. Perhaps it really would work **after all**. (BNC: B0V)

b. The men's fear of change took the form of vociferously defending the status quo in which **after all** they had everything to lose. (BNC: EVJ)

c. There was no point in trying to understand the weather: one had to submit to it. **After all**, there was something to be admired, something good and beautiful in every kind of weather. (BNC: CBJ)

(2) a. ネットアイドル歌ってきたの.日給３万**だって**. （男性: 10705-10709）

b. [勉強に意義を見出せない大学生に対して] そりゃーあなた, あなたにとっては**だって**, 飯の種になる可能性があるんだから. （男性: 772-773）

c. [大学で第二外国語を何語にするのか興味深く尋ねる相手に] そんなの気にしてないすよ. **だって**, １年の時なんかさー, 何にもやってないうちに選ぶんだから. （男性: 3920-3922）

2. 解釈に関わる類似の推論スキーマ

after all と「だって」の分析に関しては、これまでの 2 項説明ではなく、3 項による説明が有効である。Blass (1990: 129)によれば、現在見られる after all の用法のルーツは、after all is said and done というフレーズにあり、*OED*[2] では after considering everything to the contrary と定義されている。(3)はこの字義的意味に近い例である。

(3) Maggie chewed at her lip, wondering how to put it to him, but **after all** there was no way but straight out. (BNC: HGK)

(3)は、Maggie は言いたいことをどのように言おうか考えていたが、あれこれと考慮したにもかかわらず、率直に言うしかなかった、ということを伝えている。あらゆることを前もって考慮するということが、先行節から伝達される想定が実現しなかったと述べる根拠として解釈され、相反する想定に対して結論を述べるための根拠を前置きするという語彙機能は、after all の解釈が 3 項に基づくものであるということを示唆している。

一方、「NP だって」という形式における係助詞「だって」の意味から、「だって」の 3 項説明も可能である。

(4) この辛さにはインド人（も／でも／だって）びっくりした. （蓮沼 1997: 207）

3 つの係助詞は、NP が普通の状況であまり当てはまらないにも関わらず命題が成り立つことを述べるコンテクストで用いられ、多かれ少なかれ意外性を伝達する。しかしながら、この中で、「だって」は、命題を成り立たせる最も期待値が低い例として NP「インド人」を取り立て、聞き手の辛さへの信念とその信念を覆す実際の辛さとの隔たりを強化している。さらに、(5)を考えると、先行する信念と現実との隔たりの 2 項以外に、そういう結論に至ることはあり得るというニュアンスが含まれるように思われる。

(5) このカレー、インド人だって食べられなかった.

蓮沼(1997: 210-211)は、「NP だって」と文頭のどちらの「だって」にも、一般通念や当然性を有した判断が関わると述べるが、結論に至る何らかの根拠としてそれらが解釈されると考えられる。したがって、after all と「だって」は語彙情報が異なるものの、(6)のような類似の推論スキーマを仮定することができる。

(6) O but P *after all*/だってQ （O: 先行想定／P: 結論／Q: 根拠）

譲歩的用法： <u>O (¬P) P *after all*/だって</u> Q

想起的用法： O (¬P) P <u>*after all*/だって Q</u>

正当化用法： O (¬P) <u>P *after all*/だって Q</u>

(6)において、O but P は先行想定と結論の認知的隔たり（正反対の議論, 期待と現実の不一致, 視点の些細な違い、など）、Q はその対立を解決する明示的/非明示的な根拠を表す。また、発話において下線部分が顕在化する。譲歩的用法(1a)(2a)において、O は明示されないことが多いが、話し手が思った、述べた、行なったに違いないこととして必然的に拡充される。根拠 Q は非明示的であるが、例えば、(1a)では出来事が好転する兆候

などの当然と思える要因が根拠として解釈される。終助詞の「だって」の「だ」は妥当性を問い、聞き手に発話に対する評価を共有してもらいたいという話し手の態度が伝達される（加藤 2010: 146）ことから、根拠が明確ではないにも関わらず、評価を下した結論を聞き手は納得することになる。想起的用法(1b)(2b)において、後続する内容が根拠として解釈されるが、話し手の結論は明示的ではない。そのため、結論に反する先行想定は一般的な想定だと考えられるので、話し手と聞き手の意見の対立は感じられない。最後に、正当化用法(1c)(2c)において、先行想定 O が推論により拡充されるのは根拠 Q の特性にある。事実や話し手と聞き手で共有された知識、聞き手に関する背景的知識のようなアクセスしやすい情報を用いた結論の反駁不可能な根拠づけは、結論に相反する聞き手の意見や見解を話し手が先行想定として予測しているからだと言える。

3. 手続き的制約の違い

推論スキーマ(6)をもとに、after all の手続き的制約は「先行想定 O と結論 P の対立のコンテクストで, Q を根拠として解釈せよ」と定義できる。一方、「だって」は、after all とは異なり、対話における発話冒頭でも使用され、(7)では相手の発話への不同意の態度、(8)では同意の態度を示すと考えられる。

(7) A: そうかなー, でもあたしには手配は１枚もしてくれない.
B: **だって**, 頼まれなきゃやんないわ, 実費はかかるんだもん. （男性: 1212-1217）

(8) A: 飛行機で帰る.
B: **だって**, 電車は, 新幹線だったら６時間ぐらいかかりますよね, 福岡だったら.（男性: 6217-6218）

しかしながら、(9)において、話し手 B は単に話し手 A の見解に同意しているわけではない。

(9) A: あ, 暗記できたの？
B: うん.
A: あ, そう, えらかったわ, じゃあ.
B: **だって**, バスでもやったんだもん. （女性: 3644-3647）

話し手 B は、暗記できたことへの A の捉え方に微妙な隔たりを感じて強力な根拠を持ち出し、自ら称賛のレベルを上げている。同意と正当化を同時に行いながら、聞き手との認知的隔たりを調整しようとしていると言えよう。この点から、「だって」の手続き的制約は、「根拠 Q は、先行想定 O と結論 P の対立の調整である」と定義できる。さらに、その手続き的制約は高次表意の構築への制約であると考えられる。発話冒頭の「だって」は、様々な文末表現「じゃない」「(だ)もの/もん」「でしょ」「だから」「のよ」「(だ)よね」などと共起し、それぞれが、調整の仕方に異なるニュアンスを与える。例えば、「じゃない」は話し手からの強い正当化の態度、「(だ)もの/もん」は控え目な正当化の態度、「でしょ」や「だから」は聞き手の共感を求めながらの正当化の響きがある。さらに、譲歩的用法の「だって」が発話解釈に与える情意も、高次表意の構築への制約を符号化していることと関係があると考えられる。調整を「だって」の高次表意への制約とすることで、正当化、同意、同意と正当化など、先行想定と結論の対立に対して根拠が様々な調整を行うことが説明できる。

参考文献

Blass, Regina. 1990. Relevance relations in discourse: A study with special reference to Sissala. Cambridge University Press, Cambridge.

Blakemore, Diane. 2002. *Relevance and linguistic meaning: The semantics and pragmatics of discourse markers.* Cambridge: Cambridge University Press.

Carston, Robyn. 2002. *Thoughts and utterances: The pragmatics of explicit communication*. Oxford: Blackwell.

蓮沼昭子. 1997. 「だって」と「でも」 —取り立てと接続の相関. 姫路獨協大学外国語学部紀要6. 197–217.

加藤陽子. 2010. 話し言葉における引用表現—引用標識に注目して. 東京：くろしお出版.

Mori, Junko. 1994. Functions of the connective *datte* in Japanese conversation. *Japanese/Korean Linguistics* 4. 147–163.

沖裕子. 2006. 日本語談話論. 東京：和泉書院.

Otsu, Takahiro. 2018. Multifunctionality of ‘after all’: A unitary account. *Journal of Pragmatics* 134. 102–112.

Otsu, Takahiro. 2019. From justification to modulation: Similarities and differences of *after all* and *datte*. *Pragmatics and Cognition* 25: 2. 337-362.

使用データ

British National Corpus (BNC), Wordbanks (WB)

『男性のことば：職場編』, 『女性のことば：職場編』（ひつじ書房）（本文中では「男性」「女性」と略）